岡山大学教育実践総合センター紀要，第６巻（2006），pp.111-118

原　著

高校生の学級集団帰属意識の構成要因が精神健康度及び学校生活適応感に及ぼす効果

本多　公子（岡山学院大学・岡山短期大学）井上　祥治（岡山大学教育学部）

本研究では、「高等学校における学級集団帰属意識尺度」を用いて、高等学校における学級集団への帰属意識と精神的健康度、及び学校生活への適応感との関連について分析することを目的とした。まず、「高等学校における学級集団帰属意識」を構成する３因子の構造を「帰属疎外感」→「学級からの受容感」→「学級の魅力」とし、その最初の２因子「帰属疎外感」と「学級からの受容感」を取り上げ、それぞれの得点の平均値を基準に高群と低群に分け、４つのタイプに分類した。そして、それらと自尊感情、GHQ及び学校生活適応感尺度の各因子得点に対して一元配置の分散分析を行ったところ、「不安」や「不眠」、「身体的症状」といった精神的健康上の問題や、自尊感情や「友人関係」、「特別活動への参加態度」など社会的意味をもつものとの関連が示唆された。

キーワード：学級からの受容感、帰属疎外感、学級の魅力、精神健康度、学校生活適応感

Ⅰ．研究目的

これまで、学級集団への所属感の研究の多くは、小学校や中学校を対象としたものであり、高等学校における学級集団への帰属意識に関する研究は、あまり見られない。しかし、発達課題の観点においても、青年期にあたる高校生が学級集団に対し求めるものは、学童期のそれとは異なるのではないだろうか。エリクソンのアイデンティティ論によると、青年期にはアイデンティティ対アイデンティティの拡散が発達課題となる。下山(1998)によれば、アイデンティティとは、「時間的な自己の同一性と連続性の認識」と「他者が自己の同一と連続性を認知していることの認識」という２つの認識が得られることで成立するものであり、その確立は、青年期になされる。また、藤原(1981)は、正常な人格の発達では、重要な他者からの社会的是認を介して、自分が社会から是認、または受容されているといった自尊感情や安定感、有用感、信頼、自信などの形で意識される社会的自己意識を形成してゆくのである。この自己の連続性と不変性こそ同一性（identity）なのである。そして、ここにおける他者としての重要性は、親や教師から同じ年齢の仲間へと移ることから、青年期の心理的葛藤をNewman & Newman(1984)は「集団同一性vs.疎外」とよんでいる。よって、そのような時期にある高校生を対象とした学級集団への帰属意識に関する研究が、必要ではないのだろうか。

もちろん現在、高校教育は単位制や総合学科が導入され、「生徒の個性・関心の重視」「特色ある学校づくり」をめざした多様化路線が提唱されている(寺脇,1997)。このような教育制度の変化と教育の多様化は、高等学校のあり方を大きく変えたといえるかもしれない。そのことにより、学級集団の機能も、そこに所属する生徒と担任教諭との関係性にも変化が生じていると思われる。しかし、所属欲求は、最も基本的な欲求であり（Leary & Downs, 1995）、重要な社会集団から排除される又は、包含されることが心理的に重要(Baumeister & Leary,1995)である以上、高校生にとって、自らが所属する学級集団との関わりは非常に大きな意味合いを持つと考えられないであろうか。そういった観点から、本多・井上（2005）は、「高等学校における学級集団帰属意識尺度」の作成を試みている。更に、この尺度が、「学級からの受容感（以下、Ａと記す）」、「学級の魅力（以下、Ｆと記す）」、「帰属疎外感（以下、Ｏと記す）」の3因子から構成されており、それぞれが並列ではなく順序モデルがあろうことも示唆している。

蘭(1992)は、自己概念・自尊感情の形成・変容に及ぼす学級集団の効果について、学級集団は、子ど

本研究は平成１５年度岡山大学大学院教育学研究科修士論文の一部に加筆したものである。

もたちの所属・承認・自律・愛情の欲求を充足させ、防衛機能の解消と情緒的安定を促すと述べていることから、学級集団への帰属意識と、精神健康度との関連が推測される。また、集団への帰属意識については、精神医学的な考察もみられる（小此木,1976）。その中で小此木（1976）は、現代的問題として、一方に、のみこまれる不安による帰属恐怖や帰属拒否があり、他方には、うつ病に代表されるような帰属意識が過剰なためにおこってくる精神障害があると述べている。このような精神障害のスクリーニング・テストとして開発された検査法に、General Health Questionnaire（ＧＨＱ）(1972)がある。この検査法は、英国で開発され、中川・大坊（1985）によって日本版ＧＨＱ（精神健康調査票）が著された。それ以降、この日本版ＧＨＱ（精神健康調査票）を用い、大学生や、職場集団などにおける精神健康度の研究がすすめられてきた（小島ら,1992;吉岡ら,1997;山田ら,1998;）。中川・大坊（1985）も、２つの集団の精神健康度をＧＨＱ得点と標準偏差で比較するという利用方法も有効であるとしている。

ところで蘭(1992)は、松山ら(1981)の子どもの自己概念と他者関係・学校への態度の関係などについても分析から、肯定的な自己概念および、現実的自己と級友からみられていると認知する他者自己のズレの小ささが学級・学校への適応をもたらしている。と述べているが、学級・学校への適応感と帰属意識の関係については 、述べられていない。

そこで本研究では、本多・井上（2005）が作成を試みた「高等学校における学級集団帰属意識尺度」を用いて、高等学校における学級集団への帰属意識と精神的健康度、及び学校生活への適応感との関連について分析することを目的とする。

Ⅱ．方法

１）調査時期 及び調査対象

2003年７月に、兵庫県内公立高等学校第二学年普通科及び専門科生徒（男・女　計250名）対象として行い、同年10月には、兵庫県内公立高等学校第一学年普通科及び専門科生徒（男・女　計217名）を対象に行った。

２）調査項目

質問紙は以下の項目から構成されている。なお、集計に際しては、否定的な質問項目でのスケールを反転させた。

A:自尊感情の項目

Rosenberg,M.（1965）による自尊感情尺度10項目を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

B:「高等学校における学級集団帰属意識尺度」項目

本多・井上（2005）による「高等学校における学級集団帰属意識尺度」を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から ①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

C:級友との関係及び教師への態度項目

学級適応診断テスト（ＳＭＴ）中学・高校用から級友との関係項目及び教師への態度項目各15項目ずつ30項目を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

D:学校生活適応感に関する項目

高瀬ら（1986）による学校生活適応感尺度の各因子より３項目ずつ計18項目を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

E:精神健康度に関する項目

日本版ＧＨＱ28（中川・大坊, 1979）の各因子より５項目ずつ計 20 項目を採用し、その上で一部の質問項目に関しては、調査対象者が高校生であることを考慮した表現に置き換えている。４件法で回答を求めた。全てを反転項目として扱った。よって今回の調査の場合、得点が高い程精神健康度が高いこととなる。

Ⅲ．結果

「高等学校における学級集団帰属意識」の３因子「帰属疎外感(O)」、「学級からの受容感(A)」、「学級の魅力(F)」について パス解析を用いて因子間の構造を検討した。結果はTable 1に示されている。

Table 1 帰属意識３因子の構造モデルと赤池情報量基準（ＡＩＣ）

モデル名	AIC
① A → O → F	105.76
② F → O → A	105.76
③ O → F → A	62.88
④ A → F → O	62.88
⑤ F → A → O	34.95
⑥ O → A → F	34.95

Table1から、⑤、⑥に示されるモデルのＡＩＣが最も小さく、他のモデルよりもあてはまりが良いことが示されている。⑤、⑥のモデルのいずれを採択

するかは、因果の自然さで考えられよう。まず始めに「学級への魅力」という、いわば学級への全体的評価が先行するよりも、「帰属疎外感」、「学級からの受容感」が先行して、それが「学級への魅力」繋がるという因果の連鎖が自然であろう。したがって⑥のモデルが採択される。そして、そのことを踏まえ「高等学校における学級集団帰属意識」を構成するとした最初の2要因を取り上げ、自尊感情及びGHQと学校生活適応感尺度との関わりを分析するため、因子OとAをそれぞれの得点の平均値を基準に高群（O、A）と低群（o、a）に分け、以下の4つのタイプに分類した。

「学級からの受容感」低かつ、「帰属疎外感」高・・タイプ①a+o（125名）

「学級からの受容感」低かつ、「帰属疎外感」低・・タイプ②a+O（ 57名）

「学級からの受容感」高かつ、「帰属疎外感」高・・タイプ③A+o（ 73名）

「学級からの受容感」高かつ、「帰属阻害感」低・・タイプ④A+O（152名）

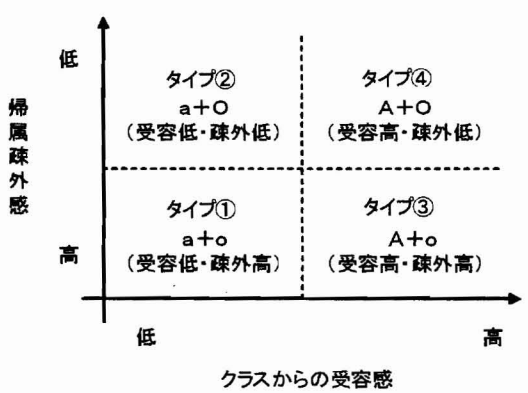


Figure 1 「学級からの受容感」及び、「帰属疎外感」の組み合わせによるタイプ分類

以上の４タイプと「学級への魅力」因子との一元配置の分散分析ではTable 2の結果が得られた。

Table 2 「学級からの受容感」の高低及び、「帰属疎外感」の高低の組み合わせによる各タイプにおける「学級の魅力」因子得点の比較

	タイプ①（受容低・疎外高）	タイプ②（受容低・疎外低）	タイプ③（受容高・疎外高）	タイプ④（受容高・疎外低）	分散分析	多重比較			
魅力	28.59	30.80	34.07	38.95	***	①<③	***	①<④	***
	(7.73)	(8.25)	(9.79)	(8.00)		②<④	***	③<④	***

平均
(SD)
*p<.05 **p<.01 ***p<.001

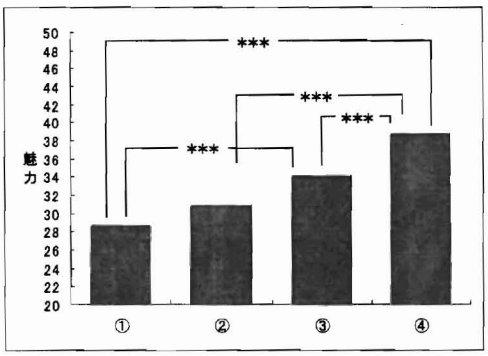


Figure 2 「学級からの受容感」の高低及び、「帰属疎外感」の高低の組み合わせによる各タイプにおける「学級の魅力」因子得点の比較

また、４タイプ間で、自尊感情及びGHQと学校生活適応感尺度の各因子得点に対して一元配置の分散分析を行った。結果をTable3～Table5及び、Figure3～Figure5に示す。

Table 3 「学級からの受容感」の高低及び、「帰属疎外感」の高低の組み合わせによる各タイプにおける自尊感情の得点の比較

	（受容低・阻害有）	（受容低・疎外低）	（受容高・疎外高）	（受容高・阻害無）					
自尊感情	34.84	34.40	40.46	39.65	***	①<③	***	①<④	***
	(8.46)	(8.71)	(9.67)	(8.26)		②<③	***	②<④	***

平均
(SD)
*p<.05 **p<.01 ***p<.001

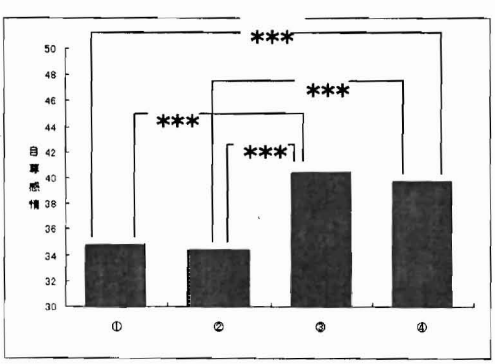


Figure 3 「学級からの受容感」、「帰属疎外感」の２因子による各タイプにおける自尊感情の得点の比較

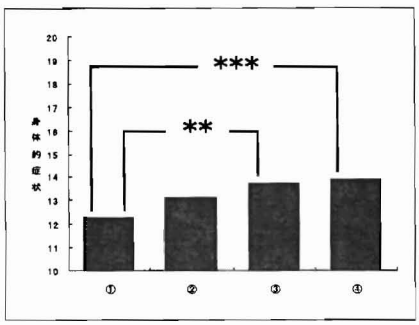
多重比較の結果、①「帰属疎外感」の有無に関わらず、「学級からの受容感」の高低により自尊感情の得点が有意に変化する。 ②「学級からの受容感」が高くかつ「帰属疎外感」がないタイプは、「学級からの受容感」が低くかつ「帰属疎外感」があるタイプとの間に有意差がある。 ③「帰属疎外感」があっても「学級からの受容感」が高ければ、「帰属

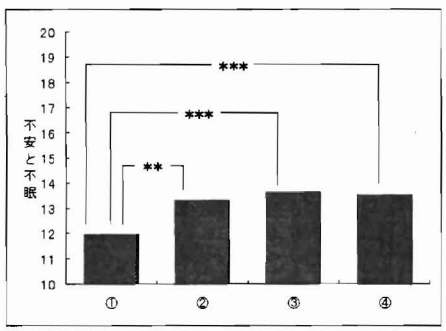
疎外感」がなくて「学級からの受容感」が低いタイプよりも自尊感情の得点は高い。④「学級からの受容感」が同じ群の場合、「帰属疎外感」の有無によって自尊感情の得点が有意に変化していることはない。

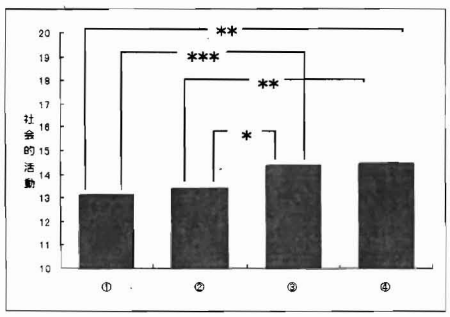
Table 4 「学級からの受容感」の高低及び、「帰属疎外感」の高低の組み合わせによる各タイプにおける GHQ の得点の比較

	タイプ①（受容低・阻害有）	タイプ②（受容低・疎外低）	タイプ③（受容高・疎外高）	タイプ④（受容高・阻害無）	分散分析		多重比較		
身体的症状	12.21	13.12	13.71	13.86	**	①<③	**	①<④	***
	(3.34)	(3.47)	(3.33)	(3.33)					
不安と不眠	11.98	13.35	13.64	13.51	***	①<②	**	①<③	***
	(3.22)	(2.59)	(3.48)	(3.30)		①<④	***		
社会的活動	13.12	13.43	14.37	14.48	***	①<③	***	①<④	***
	(2.52)	(2.13)	(2.09)	(2.05)		②<③	*	②<④	**
うつ傾向	13.19	14.18	15.66	16.28	***	①<③	***	①<④	***
	(4.19)	(3.63)	(3.57)	(4.04)		②<③	*	②<④	**

平均
(SD)
*p<.05　**p<.01　***p<.001







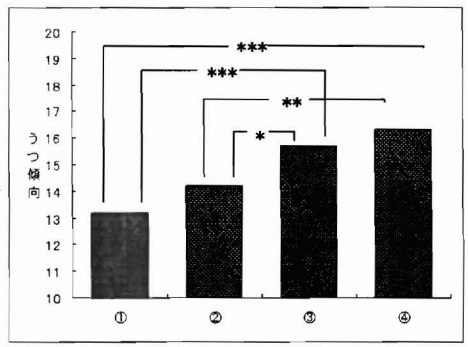


Figure 4 「学級からの受容感」、「帰属疎外感」の２因子による各タイプにおけるＧＨＱの各因子得点の比較

タイプ①ａ＋ｏ「学級からの受容感」低かつ、「帰属疎外感」高

タイプ②ａ＋Ｏ「学級からの受容感」低かつ、「帰属疎外感」低

タイプ③Ａ＋ｏ「学級からの受容感」高かつ、「帰属疎外感」高

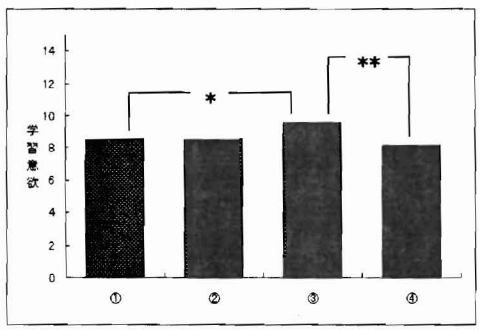
タイプ④Ａ＋Ｏ「学級からの受容感」高かつ、「帰属阻害感」低

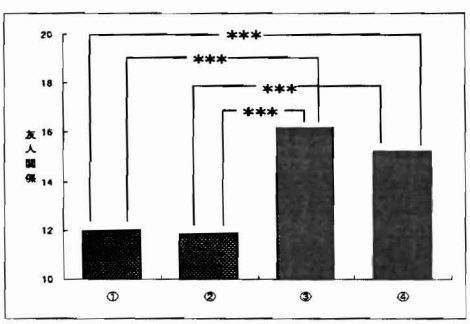
多重比較の結果、全ての因子において、タイプ①よりタイプ④の方が有意に高く、またタイプ①よりタイプ③の方が有意に高かった。「社会的活動障害」、「うつ傾向」に対しては、「帰属疎外感」低のタイプ間（②と④）にあっても「学級からの受容感」が高いタイプ④の方が低いタイプ②よりも有意に得点が高かった。またさらに、「社会的活動障害」、「うつ傾向」に対しては、「帰属疎外感」は有るが「学級からの受容感」が高いタイプ③の方が「帰属疎外感」はないが「学級からの受容感」が低いタイプ②より有意に得点が高い。「不安と不眠」に対しては「学級からの受容感」が低いタイプの場合、「帰属疎外感」低のタイプ②の方が、「帰属疎外感」高のタイプ①より有意に得点が高ことが認められる。

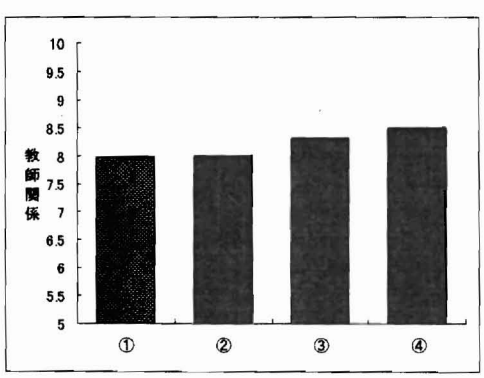
Table 5 「学級からの受容感」の高低及び、「帰属疎外感」の高低の組み合わせによる各タイプにおける学校適応感尺度の各因子得点の比較

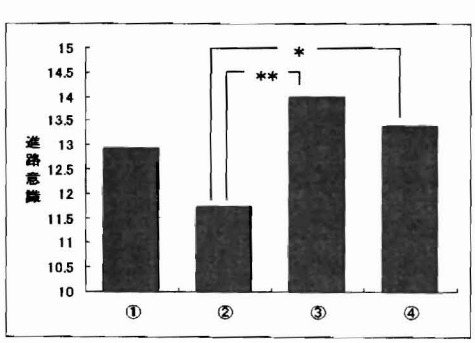
	タイプ①（受容低・疎外高）	タイプ②（受容低・疎外低）	タイプ③（受容高・疎外高）	タイプ④（受容高・疎外低）	分散分析		多重比較		
学習意欲	8.44	9.47	9.59	8.10	*	①<③	*	③>④	**
	(3.20)	(4.15)	(3.92)	(3.67)					
友人関係	12.00	11.84	16.19	15.20	***	①<③	***	①<④	***
	(3.90)	(3.71)	(3.30)	(3.41)		②<③	***	②<④	***
教師関係	7.98	8.00	8.32	8.51					
	(3.35)	(3.54)	(3.84)	(3.99)					
規則	12.12	11.09	11.10	10.22	**	①>④	***		
	(3.58)	(3.99)	(4.43)	(4.04)					
適応意識	12.92	11.72	14.00	13.39		②<③	**	②<④	*
	(4.72)	(5.25)	(5.24)	(4.75)					
特別活動	10.83	10.47	13.61	13.92	***	①<③	***	①<④	***
	(3.68)	(3.83)	(4.39)	(3.80)		②<③	***	②<④	***

平均
(SD)
*p<.05　**p<.01　***p<.001

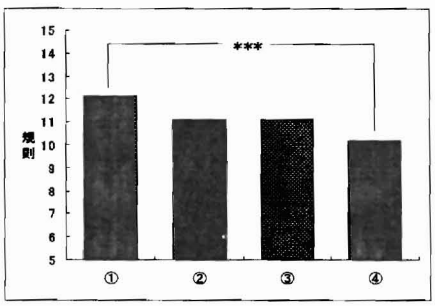








タイプ①a＋o「学級からの受容感」低かつ、「帰属疎外感」高
タイプ②a＋O「学級からの受容感」低かつ、「帰属疎外感」低
タイプ③A＋o「学級からの受容感」高かつ、「帰属疎外感」高
タイプ④A+O「学級からの受容感」高かつ、「帰属阻害感」低



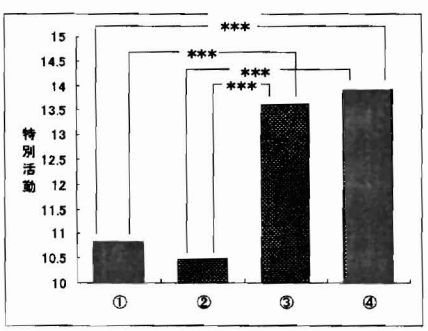


Figure 5「学級からの受容感」、「帰属疎外感」の２因子による各タイプにおける学級生活適応感尺度の各因子得点の比較

多重比較の結果、「学習意欲」に対しては、他の因子にもみられるようにタイプ③の方がタイプ①より有意に高い。とともに「学級からの受容感」が高い場合、「帰属疎外感」高のタイプ③の方が、「帰属疎外感」低のタイプ④より有意に得点が高い。

「友人関係」、「進路意識」と「特別活動への参加態度」に対しては、「帰属疎外感」がない場合「学級からの受容感」が高いタイプ④の方が低いタイプ②より有意に得点が高く、また「帰属疎外感」が高くても「学級からの受容感」が高いタイプ③の方が、「帰属疎外感」がなく、でも「学級からの受容感」が低いタイプ②より有意に得点が高い。「友人関係」と「特別活動への参加態度」に対しては、「帰属疎外感」の有る場合「学級からの受容感」が高いタイプ③の方が低いタイプ①より有意に得点が高い。ただし、「友人関係」に関しては「学級からの受容感」が高いタイプ（タイプ③と④）において、「帰属疎外感」の高低によって得点差に有意な傾向がある。

また、「帰属疎外感」が低く、かつ「学級からの受容感」が高いタイプ④と「帰属疎外感」が高く、かつ「学級からの受容感」も低いタイプ①との比較において、「友人関係」と「特別活動への参加態度」では、タイプ①よりタイプ④の方が有意に得点が高

いのに対し、「規則への態度」では、タイプ①の方がタイプ④より有意に得点が高い。「教師関係」に対しては、タイプ間の有意さを認めない。

Ⅳ. 考察

Table 1から「学級からの受容感（A）」と「帰属疎外感（O）」の高低の組み合わせによる4タイプにおける「学級の魅力」因子の得点の変化から、「学級からの受容感(A）」と「帰属疎外感（O）」の高低が「学級の魅力」因子の得点を左右していることがうかがえる。ただ、タイプ①、②間に「学級への魅力」について有意差は認められない。が、①と③に有意差があり、②と③には有意差がないことから、「学級からの受容感」が低くても、「帰属疎外感」というマイナス要因が低減されたタイプ②には、多少なりとも学級への魅力が芽生えかけているといえるのではないだろうか。以上のことからも、「高等学校における学級集団帰属意識」を構成する最初の２要因として「帰属疎外感（O）」と「学級からの受容感（A）」が示唆されるように思われる。また、これら2因子は、個別具体的行動要因から成り立ち、学級における日常生活の中で、担任教諭によって援助可能であると考えられる概念である。

Table2からも明らかなように、４タイプにおける自尊感情の得点の変化から、「学級からの受容感」の高低が、従属変数である自尊感情の得点を左右していると言えそうである。自分自身に対する自分によるバロメーター ともいえる自尊感情が、「学級からの受容感」と大きく関わっていることは、Leary & Downs（1995）の社会的計量器モデルの研究と一致する。また、相対的な低自尊感情者は、事実上あらゆる否定的情動をいっそう強く経験する傾向があり、高自尊感情者と比較して、低自尊感情者はよりいっそう不安、抑鬱、孤独である傾向があるとしている。つまり、自尊感情が低いほど社会の障害が高くなる。本研究においても、Figure4,5が示すように自尊感情の関わり方の分析結果と同じパターンを示す因子に、ＧＨＱの「社会的活動障害」因子と「うつ傾向」因子が、また学校生活適応感尺度においても、自己に対する客観的評価の意味合いをもつ「友人関係」因子と、ソーシャル・スキルの能力を表すともいえる「特別活動への態度」因子に対して、同じ分析結果パターンが示されている。そこで次に、もう一方の因子である「帰属疎外感」の高低も含め、個別具体的にＧＨＱ及び、学校生活適応感尺度の各因子との関係について考察してみたい。

まず、同じように「学級からの受容感」が低くても「帰属疎外感」に高低差のあるタイプ①と②において有意差が認められる因子は、ＧＨＱの「不安と不眠」である。このことは、「帰属疎外感」というマイナス要因の有無に対し、最も敏感に不安や不眠という状態が生じることを示しているように思われる。

「身体的症状」に関しては、その結果から「帰属疎外感」というマイナス要因が有り、「学級からの受容感」も得られていない生徒に具体的反応として生じていると考えられる。つまり、「帰属疎外感」が軽減されることにより、その身体的症状は多少とも軽くなることが示唆されているのではないだろうか。また、「社会的活動」と「うつ傾向」において、自尊感情の関わり方の分析結果と同じ傾向が示されていることは、Baumeister & Leary(1995)の、 対人的機能が受容をすすめるという考察とも一致する。つまり、「帰属疎外感」というマイナス要因が軽減されただけでは自尊感情に影響を与えるまでには至らず、「学級からの受容感」が高まってこないと自分自身の価値や意味を見いだすことができにくい。従って、「社会的活動」と「うつ傾向」といった社会的意味をもつ因子の改善には、「学級からの受容感」が不可欠ではないかと考えられる。

学校生活適応感尺度の各因子における分析結果からは「集団同一性vs.疎外」(Newman &Newman,1984)を心理的葛藤のテーマとし、他者としての重要性が、親や教師から同じ年齢の仲間へと移る高校生ならではの結果が示されたように思う。

例えば、「教師関係」では、各タイプ間に有意差が見られないばかりでなく、各タイプの因子得点が7.98~8.51と低いことも特徴であり、これらは教師に対する関心の低さを表しているともいえるかもしれない。一方、「規則」においては、タイプ④がタイプ①に比して有意に低い。これは、「学級からの受容感」高かつ、「帰属阻害感」低の生徒にあっては学級における自分の行動基準を学校の規則に求めるのではなく、クラスの仲間うちにおけるルールにおいているといえるのではないだろうか。逆に「帰属阻害感」が高く「学級からの受容感」も感じていない生徒にとっては、学校の規則を自分の行動基準とせざる得ない面や、学校の規則を自分の行動基準とするがゆえに、クラスメートから浮き上がり「帰属阻害感」を感じたり「学級からの受容感」が得られ

ないとも考えられる。

「進路意識」や「学習意欲」においては、学力等他の要素を絡めさらに分析をすすめる必要があると考えている。

また、先に述べたとおり、「友人関係」因子と、「特別活動への態度」因子については、自尊感情の関わり方の分析結果と同じ分析結果パターンが示されている。これは、「学級からの受容感」を感じることで、特別活動に積極的に参加しやすくなる。そして特別活動へ参加する事により、「学級からの受容感」がより増すというプラスの循環的な効果が生じ、良好な友人関係構築でき、延いては自尊感情が一層促進されることを示唆しているのではないだろうか。

以上のことより、「不安や不眠」、「身体的症状」など訴える生徒に対して、肯定的感情を持たせるよう援助をするだけでなく、「帰属疎外感」の高低を確認し、「帰属疎外感」を感じている生徒には、「帰属疎外感」を減じる、つまり否定的事項の原因を取り除く手だてを講じることにより、担任教諭が直接的に関与して、生徒の「不安」や「不眠」、「身体的症状」といった精神的健康上の問題の解決をサポートできることの可能性。そして、ＧＨＱの得点や精神健康度に問題がみられる生徒や「友人関係」、「特別活動への態度」の得点の低い生徒に対し担任教諭は、「学級からの受容感」を意識できるような学級運営を行ったり、行事での経験などにより対人関係のスキルを身につけさせるうことにより、前述の生徒の精神健康度や学校生活適応感の向上に間接的に関与できる可能性が示唆されたと考える。

以上のことから、高等学校における学級集団への帰属意識と健康、心理的適応の関係の一端を明らかにし、教育現場へのほんの些細な提案をすることができたのではないかと考える。

引用文献

蘭千壽　1992　セルフエスティームの形成と学校の影響 178-199. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編集）セルフエスティームの心理学. ナカニシヤ出版,

Baumeister,R. F. , Leary, M. R.　1995　The Need to Belog:Desire for Interpersonal　Attachments as a Fundamental Human Motivation . *Psychological Bulletin* , Vol.117 ,　No.3 , 497-529.

本多公子・井上祥治　2005　高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み. 岡山大学教育実践センター紀要, 5

藤原正博　1981　自我同一性と自尊感情の関係 85-89.

小島賢一・野口正成・児玉隆治・谷俊治・井上義朗　1992　GHQテストからみた東京学芸大学学生の健康調査結果について. 東京学芸大学紀要　第5部門　芸術・体育(東京学芸大学), 44, 191-197.

Leary, M. R. , Downs,D. L.　1995　Interpersonal Functions of the Self-Esteem Motive : The self-Esteem System as a sociometer. In M. H. Kernis. (Ed.), *Efficacy, Agency, and Self-Esteem* (pp. 123-144). Plenum press, New York,

松山安雄・秋葉英則・北村絹江　1981　児童の自己概念と学校に対する態度について. 大阪教育大学紀要（第Ⅳ部門), 30, 115-126

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉冷三　1986　高校生用学校環境適応感尺度作成の試み. 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145

中川泰彬・大坊郁夫　1985　日本版GHQ 精神健康調査票＜手引＞. 日本文化科学社

Newman, B.M. , Newman, P.R.　1984　*Development Through life*：Third Edition. A Psychosocial Approach. 福富護（訳）1988　新版生涯発達心理学　エリクソンによる人間の一生とその可能性. 川島書店

大西佐一・松山安雄編　1967　ＳＭＴ、学校適応診断検査手引き. 日本文化科学社

小此木啓吾　1976　精神医学からみた帰属意識の問題. 通産ジャーナル, 9(8), 78-84.

Rosenberg, M.　1965　society and The adolescent selfe-image. Princeton: Princeton University　Press.

下山晴彦　1998　青年期の発達. 183-205. 下山晴彦（編集）教育心理学Ⅱ　発達と臨床　援助の心理学. 東京大学出版会

高瀬克義　1986　学校生活適応感尺度. 577-581. 堀洋道・山本真理子・松井豊（編集）心理尺度ファイル　人間と社会を測る. 垣内出版

寺脇研　1996　動き始めた教育改革. 主婦の友社

山田裕章・馬場園明・橋本公雄・吉永亮治　1998　GHQ因子得点を利用した集団のメンタルヘルス、健康科学（九州大学健康科学センター), 20, 9-14.

吉岡伸一・綾女美奈・川原隆造　1997　鳥取県自治体職員のメンタルヘルスに関する調査　GHQ60 による検討. 自治体安全衛生研究, 19, 58-65.

Title : The effects made on "The General Health" and on "Acceptance to School Life" by constituent factors of "Belongingness to Classroom Group" of high school students.

Kimiko HONDA (Okayama Gakuin University. Okayama Junior College)
Shoji INOUE (Faculty of Education Okayama University)

Abstract:

This study aimed at analizing correlations between "Belongingness to Classroom Group", "The General Health" and "Adjustment to School Life", by using "Belongingness to Classroom Group Scale in high school" As a first step, causal analysis was used to determine temporary orders of three factors which constitute "Belongingness to Classroom Group in high school", and the earliest two factors of "Obstacle to Belongingness" and "Acceptance from Classroom"were taken up and, on the basis of an average of scores obtained, a high group and a low group were arranged to make them classified into 4 types. Then, one way analysis of variance was used for scores obtained by each factor of "Self-Esteem", "G.H.Q"., "Adjustment to School Life", and of above-mentioned 4 types. As a result, It was suggested that there were positive correlations with problems of the general health such as uneasiness, sleeplessness or physical symptoms, as well as with the matters having social significance like self-esteem, friendship, participation in special activity, and etc.

Keywords: Acceptance from Classroom, Obstacle to Belongingness, Attraction of Classroom, The General Health, Adjustment to School Life.